日中におけるこれまでの周作人研究について

山口 早苗（YAMAGUCHI Sanae）*

この論考は、日中におけるこれまでの周作人研究の歴史と現状について考察することを主な目的とし、これからの研究の方向性についても言及するものである。

中国における周作人研究は 1980 年代に始まった。周作人研究は、実兄である魯迅研究から派生する分野として開始され、魯迅研究に携わっていた者が研究を行うものであった。実際、周作人研究が中国近現代文学研究の一分野として確立されたのは、近年のことであり、また専門的に周作人研究を行う研究者が現れ始めたのも、最近のことである。

周作人研究の歴史が比較的浅いのは、彼が日中戦争中に対日協力者として、華北政務委員会教育総署督弁などの職に就いたことが関係している。彼は、政治的に負の歴史をもつ、「漢奸」として認知されていたのである。

周作人に対する評価として、1942 年の段階で何其芳は「二つの異なる道」(「两种不同的道路」[1])の中で以下のように指摘している。個人主義から出発し、趣味主義へと移行した周の思想は「その結果、迷路に陥り、民族主義から日本のファシストの手の内で、民族の罪人となった」(「其结果从寻路到迷路，从民族主义走到了日本法西斯手掌里，成为民族的罪人」）という否定的なものが一般的であった。

80 年代における周作人研究に関しても、彼の「漢奸」としての経歴をふまえつつ、政治的な評価について言及するものが多かった。また黄裳は周作人研究の目的として、決して彼の名誉回復が目的なのではなく、中国文学史への研究資料の提供、また周作人という人物を例にとることによって、中国知識人の致命的な弱点を探し出し、後世のための教訓とすることを挙げていた。このような一種消極的な理由から研究を開始することになった経緯がある。

しかし、1985 年には転機が訪れる。周作人に関する著作が続けて発表され、新聞メディアでもさかんに報道されたことから生まれた「周作人熱」という現象である。このとき周作人という人物に光が当てられたのである。

この時期、周作人研究を行った舒蕪は「歴史とは本来、明確なものである――周作人の華北教育督弁偽職就任に関する問題」(「历史本来是清楚的―关于周作人出任华北教育督办伪职的问题」[2])の中で、魯迅と周作人を同列に論じた。周作人が五四の伝統と知識人の自主意識を堅持し、思想の自由を阻害するものに断固として反対するという立場をとり、代わりに魯迅は左翼陣営に参加し、現実と妥協しながら五四の伝統を守る立場であったと分析した。しかし、このように意図的に周作人評価を引き上げようとする動きに対して、反対意見も出されることになる。例えば、解志熙や袁良駿のもので、周作人の評価が歴史的・政治的背景から乖離すべきではないと主張するものである。

周作人を肯定的に評価する舒蕪のような意見は、周作人研究者の中には少なからず存在していた。周の対日協力にいたる過程は研究者の間でも諸説ある。陳思和は「周作人の伝記に関して」（「关于周作人的传记」[3]）の中で、「思想上の超越した気骨と性格上の実利主義は、周作人の「下水」の重要な原因を構成していると考える（中略）一人の個人主義として、彼は決して国家民族

* 東京大学総合文化研究科博士課程。

1 『何其芳文集　第 4 巻』人民文学出版社、1983 年。

2 『魯迅研究月報』1987 年 1 期。

3 『中国現代文学研究叢刊』1991 年 3 期。

の名分によって個人の生命を犠牲にすることを望まなかった」（「思想上的超越气节与性格上的实利主义，我觉得是周作人下水的重要原因构成（中略）作为一个个人主义者，他并不想为国家民族的名分去牺牲个人的生命」）と述べている。黄開発は「周作人の附逆及びその他に関して」（「关于周作人的附逆及其他」[4]）の中で「人生と民俗に対する二重の悲観は、周作人の附逆の基本的要素を構成している」（「对人生和民族的双重悲观，构成了周作人附逆的基本原因」）とし、周作人の思想背景として「悲観」が存在すると分析している。これらの意見は周作人の 1920、30 年代の思想的経緯を反映した形で提出されている。周作人の対日協力については今でもその是非について議論が多くかわされる部分でもある。

次に、日本における周作人研究について論じる。研究の開始は中国より早く、1970 年代から木山英雄によって始められた。それ以前、戦前から周作人への注目は少なくなかったが、その研究方法は著作の翻訳などに限られていた。木山の研究は、主に周作人思想を明らかにすることにあり、その研究対象は多岐にわたっている。最も重要なのは、周作人の「漢奸」問題について考察した『北京苦住庵記―日中戦争時代の周作人』[5]という論考で、豊富な資料を使用し、周作人の当時の状況を客観的に把握することに努めている。この中で木山は、日中戦争中の彼の思考、また周が「漢奸」となる直接的な原因を作った事件について論じている。木山の論考は、80 年代に中国大陸で行われた研究と比べると、より客観的に、加えて同情的に周の行動・思想を分析しているといえる。

日本における周作人研究は木山の著作以降、単著として発表されたものは少なく、活発に議論が行われていたとは言い難い状況にあった。

しかし近年、日本では立て続けに周作人に関する書籍が刊行された。これらの著作は木山英雄教授以降の日本の周作人研究を担ってきた次世代の研究者によって記されたものだったともいえる。特に、伊藤徳也『「生活の芸術」と周作人―中国のデカダンス＝モダニティ』[6]は最近の日本における周作人研究の代表的な著作である。

伊藤は本書の「まえがき」の中で、このように述べている。「私の中には、周作人が従来歴史的な関心からしか注目されてこなかったことに対して抗議したいという衝動がずっと蠢いている。（中略）だいたい、近現代中国に対する日本語読者の主な関心はというと、結局は政治史と経済であり、その文芸や思想は政治史や経済と余りに密着したものとして見られ、自立した関心の対象にはならなかった。」

これは注目に値する発言であろう。伊藤の周作人研究の根本は歴史研究としてではなく、芸術的関心、彼の個性、またその特殊性により重点を置いたものなのである。具体的には、伊藤の研究は「頽廃」などの美学、倫理学の問題を通して、周作人の思想を貫徹するものを探求するものである。これは木山英雄らの研究からは大きく舵を切った形となっている。

しかし、序説において、伊藤は周作人が傀儡政権の要職にあった当時においても、「彼には、個人の凡庸な日常的な生を自分本位に守ろうとする堅い信条があった」と述べており、本書で取り上げる「生活」という概念が周作人の「落水」問題にも影響を及ぼしたと考えているようにみえる。伊藤は歴史的角度から自由になろうとするものの、やはり木山の研究を踏襲している部分があり、最終的には漢奸となった周作人の思想を究明する方向に向かっているように感じる。

このように研究対象が政治的な方面から芸術的な方面へと転換する動きは、実は中国大陸においても見られるものである。例えば、黄開発は現在の中国における周作人研究について、周の思

---

4 『文芸報』1992 年 2 月 29 日。
5 筑摩書房、1978 年。
6 勉誠出版、2012 年。

想研究はある程度蓄積がある一方、周の散文芸術についての研究が不足していることを指摘している。周の散文は多く審美的、芸術的方面からも称賛されるものであるが、これを研究することで政治的な関心からのみ目を向けられてきた彼の文章を異なる角度から考察することを提唱している。

確かにこの動きには納得することができる。しかし本来、周作人の文章自体が歴史的な背景から、当時の政治に反発する形で書かれていることを加味すれば、周の散文を芸術的関心からのみ着目することはその研究がバランスを欠くことになりかねない。このように考えれば、日中における周作人研究は同様な問題に直面しているように見える。最終的には歴史的な背景、あるいは芸術性をうまくバランスよく含んだ研究が理想とされるのではないかと考える。加えて、これには周作人と同時代人との比較、また彼の生きた時代の思潮と彼の思想・文章を照らし合わせてみることも必要になってくるだろう。政治的・歴史的な評価からひとまず離れた研究をより客観的なものにするには、彼の生きた時代、周囲との関係などの考察が不可欠なのである。

参考文献：

孫郁、黄喬生主編『回望周作人　是非之間』河南文学出版社、2004 年
舒蕪『周作人的是非功過』人民文学出版社、1993 年
木山英雄『周作人「対日協力」の顛末　補注『北京苦住庵期』ならびに後日編』岩波書店　2004 年